Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

指定討論

瀧本，美子

(Citation)
大学評価学会第16回全国大会　「様々な困難を抱えた大学生への授業づくり」,公開企画1:1-7

(Issue Date)
2019-03-02

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005696

指定討論

討論者
龍谷大学障がい学生支援室　瀧本美子

はじめに

國本先生、瀧本知加先生、学生のMさん、ご報告ありがとうございました。

私は、京都にあります龍谷大学の障がい学生支援室で支援コーディネーターをしております瀧本美子と申します。先程報告されましたMさんが通う大学の支援室のコーディネーターです。

まず、報告についての感想ですが、先生方のお話は、いわゆる大学のユニバーサル化が進む中、多様な個性を持った学生が入学してきている実態と、その学生達と日々の授業で丁寧に向き合いながら、「学生を理解すること」または「寄り添うこと」を大切にされている教育実践についての報告でしたが、大学においてこの様に熱心に取り組んでおられる先生方がいらっしゃるということに大変感動いたしました。今日参加された皆さまの中にも、大学でこの様にきめ細かく学生を支援し、育てていることに驚かれた方がたくさんいらっしゃるのではないかと思います。非常に熱心かつリアリティのあるご報告、ありがとうございました。

学生の発表は、一緒に準備を重ねてきましたので、まずは彼女に「お疲れ様」と伝えたい。今回の発表は、昨年11月28日に龍谷大学で開催した「知り合うことから始めよう！共生のキャンパスづくりシンポジウム」で発表されたものを基にして、「授業づくり」について加筆したもので、かれこれ半年余り学生と支援室とでやり取りを続け作成されたものです。Mさんの発表は素晴らしかったと思いますし、我々はMさんの報告から大学における授業づくりや障がい学生支援に関する様々な学びを得ることができます。

まずは、少しだけお時間を頂き、Mさんの報告について振り返りたいと思います。

1. Mさんの報告「自分を知り、自分を伝え、共に授業をつくる：発達に障がいのある大学生のわたしが授業理解のために取組んだこと」について

発達に障がいのあるMさんは、入学した頃は周りの学生に圧倒され、緊張し、初めて行う履修登録にも大変苦労されました。しかし、真面目な性格でコツコツ努力するMさんは、学部の教務課に毎日通い続け、質問を繰り返しながら登録方法をマスターされます。1回生の後期になると、そんなMさんの姿に気づいた一人の学生が現れ、「ランゲージ・スタディ・エリア」という語学試験の自主学習をする部屋へ誘います。この場所がMさんにとって最初の居場所になります。居場所が見つかりほっとしたのもつかの間、2回生になると授業が難しくなり、「ノートが取れない」「大切なところがわからない」「授業の全体像が捉えられない」などの困難さを自覚するようになります。診断を受けていなかったMさんは、小学校の頃家庭訪問で、担任の先生と母親の話を偶然聞いてから長い間自分の胸の奥にしまっていたことを思い出します。「発達障がいかもしれない」。Mさんは、一人で大学の「障がい学生支援室」を訪ねま

す。そこで、「発達障害者支援センター」を紹介され、「自閉症スペクトラム障害（ASD)」という診断を受けます。診断を受けたことで気持ちはすっきりしたものの、同時に「障がいを理由に配慮してもらうことは甘えだ」という気持ちが湧き上がり、再び地道な努力をし続けます。悶々とした気持ちのまま、カナダへの留学もチャレンジしました。

帰国後、3 回生になり授業が更に難しくなってきたため、障がい学生支援室の支援コーディネーターと相談し、教員や関係者に集まってもらいカンファレンスを開くことになります。M さんは、支援コーディネーターに相談しながら「自己の障がいの特性や授業における困難さ」をまとめ、そのペーパーを持ってカンファレンスに臨みます。カンファレンスには、発達障害者支援センターの心理士にも参加して頂き、まず M さんがペーパーを読み上げ「自己紹介」した上で、M さんと関係者で学びやすい環境づくりについて検討がなされました。M さんの「自己紹介ペーパー」には、「口頭のみの説明ではわかりにくいこと」「ノートがとれないこと」「他の学生がノートをとっている音が聞こえると不安や焦りが生じること」「グループワークでは話の大きな流れがつかみにくいこと」「課題の出題意図がわからないためレポート等の構成が難しいこと」など、非常に細かく具体的な内容が書かれています。M さんは最初大変緊張していましたが、参加していた教員の「君を頑張っていないと思っている人は、誰もいないよ」という言葉に救われ、「カンファレンスをやって良かった」と思ったそうです。

ところがカンファレンスだけでは、履修している全ての授業の教員に M さんのことを理解してもらうことはできません。大学は、小中学校の様に毎日教員が顔を合わせることはなく、非常勤の先生方もたくさんいらっしゃるため情報伝達がとても難しいのです。そこで M さんは「自己紹介ペーパー」を持ち、各学期の最初の授業日に教員を訪ね、直接話をするようになります。M さんは、「自分の特性を『自分の言葉』で相談することで、教員と話しやすい関係をつくることができ」、そんな関係性が生まれることで、「授業中教員からの目配せや声かけが増え、授業を受けやすくなった」と言われていました。更に、授業後、わからないことを直接質問に行くこともできるようになり、順調に単位を取得していかれました。M さんの履修された各授業の取組は、「学生発の授業づくりを振り返るシート」（回収資料）をご参照ください。また、「授業前」「授業中」「授業後」の M さんの取組と、「居場所」である障がい学生支援室との関係性を図に表すと、パワーポイントの 4 ページにございます「自分の学びサイクル」になります。M さんの「授業理解」のための行動を支えていたのは、居場所である障がい学生支援室で、そこには、「休息」、「相談」、「仲間」という 3 つの要素があるということが描かれています。「自分の学びサイクル」は、M さんの「諦めない強い気持ち」が生みだした、発達に障がいのある学生の大学におけるひとつの学習モデルですが、私は全ての学生達に真似して欲しい意欲的な学習スタイルだと思います。

また、M さんにとって最も思い出深かった取組が、「障がい学生支援に関心のある学生有志」で取り組まれている「共生のキャンパスづくりシンポジウム」です。M さんは、3 回生、4 回生の 2 年間、実行委員会のメンバーでした。4 回生では、実行委員長も務めました。M さんは、3 回生の時は障がいのあることを公表せず、「障がい学生支援に関心のある有志」として参加していましたが、4 回生になり実行委員長を務める中で、徐々に気持ちが変化していったそうです。M さんは、「皆の前で『発達障がいを持っている』と言った後、周りがどう思うか、周りの反応ばかり気にしていたけれど、他のメンバーの前向きな姿、真剣に取り組んでいる姿を見て、4 年間つくりあげてきた自分自身を表現したいと思う様になった」と言います。そして「自分の実体験が、これからの学習支援の役に立つことを願って」障がいを公表して発表することを決意されました。

最後にMさんは、自分と同じ目に見えない障がいで悩んでいる学生に対し、「自分の言葉で、自分の特性や言いたいことを伝えることがとても大切」と訴えられていました。「そうすることで、『言えた』『認めてもらえた』という自信と安心感が生まれ、相手との関係性がより良くなるから、勇気を出して！」と仲間の背中を押します。更には、勇気を出して発信するためには、信頼できる人と何度も対話を繰り返し、自分の言いたいことを「確認」し「整理」する作業が欠かせないとも言われていました。「対話」の相手として、大学や支援者には、「学生の声に積極的に耳を傾けて欲しい」と訴えられていたことを私は重く受け止めました。教師を目指しているMさんは、4月から大学院へ進学されます。

「授業づくり」について議論する際、本来は授業を受けている学生の視点というのが一番大切だと思うのですが、実際のところ、教員と学生が同じテーブルにつき授業づくりについて検討することは、本当に少ないというのが現実でしょう。ですので、今日はこんな機会を持てたということだけでも、非常に意義深いことだと思います。「学ぶ」という学生からのベクトルと、「教える」という教員からのベクトル、そこが上手くかみ合っていくことが重要だと思いますので、この後の討論では、先生方と学生とで一つの授業を創っていくイメージを膨らませたらいいなと思います。

2. 大学における障がい学生支援の4つのテーマ

Mさんの発表にありました「障がい学生支援室」は、2016年の「障害者差別解消法」の施行前後に設置された大学が多く、未だあまり広く知られていません。本日は、一般の方もたくさん参加してくださっていますので、少しだけお時間を頂き、自己紹介と大学における障がい学生支援について紹介したいと思います。パワーポイントの資料をご覧ください。

最初に自己紹介ですが、私は4年前まで大阪南部の自治体で働いていました。保健・福祉・教育の分野で仕事をしましたが、最後の15年間は、主に子育て支援と子どもや家庭の相談現場におりました。「子ども家庭課」という、保健・福祉・教育を横断する部署を設置していましたので、保育所や学校にもほぼ毎日の様に伺い、情報共有し支援方法について検討するといったことを行っていました。また、市民と協働で「子育て支援事業」を立ち上げていくなど、専門職であり、行政マンでもありましたので、施策の立案、執行といった業務も随分行ってきました。2015年4月より大学へ勤務し、丸4年が過ぎようとしているところです。

個人的には、ここに書かれているように様々な困難を経験してきました。話すと長くなるので省略しますが、私の中には「支援をする人」と「支援を要する人」が同居しています。人間は、みんなそうではないかと思います。どの部分が強調されるかによって「支援をする人」になったり、「支援を必要とする人」になったりするのではないでしょうか。つまり、自分の中になる「当事者性」といったものを胸の内に持っておく、忘れずに自分の感性の中に温めておく、特に障がい学生支援など「今、支援を必要とする人」に出会う場においては、とても重要なことではないかと思います。

次に、龍谷大学における障がい学生支援について紹介します。龍谷大学では2014年10月に「障がい学生支援室」を設置し、2015年4月から支援コーディネーターを採用し本格的に事業を開始しました。今では、3学舎それぞれにコーディネーターが一人ずつ配置されています。利用学生については急増し、昨年度は、実人数で200名を超える学生達が利用しました。学生数は約2万人ですから、約1％の学生が障がい学生支援室に登録し利用していることになります。高等教育機関における、障がい学生数の増

加は全国的な傾向で、そもそも大学のユニバーサル化と共に多様な学生が入学していたこと、2016 年障害者差別解消法の施行などが契機となり顕在化してきたことなどが、増加の理由だと考えられています。また、特別支援教育の充実により高等学校からの引継ぎも増加しています。多様な学生が入学している実態については、先程、國本先生、瀧本先生のご報告にあった通りですが、龍谷大学の障がい学生支援室登録学生の 60%～65%が発達障がい、または精神に障がいのある学生です。

全体の学生達の様子を見ていますと、益々競争的な社会に身を置かざるを得ない状況において、「大学を卒業しなければ人生の落後者になる」という恐怖に駆り立てられているように感じます。特に障がい学生支援室を利用している学生達の「努力する姿」は、身につまされるものがあります。先程の M さんの発表の中で、課題をこなすためのスケジュールのカレンダーをご覧になられたと思いますが、今大学は、欠席にも厳しく、「猛烈に勉強させられるところ」に変貌しています。その中で、様々な困難を抱えながら、単位を取得していくのは並大抵なことではありません。

また、保護者の方もたくさん相談に来られます。いじめや不登校を経験した学生も多数います。家計が苦しいため月々15 万円以上も奨学金の支給を受けている学生もいます。親からの援助がないため、アルバイトと奨学金で、学費と生活費を賄うのですが、途中で精神疾患を患い奨学金の変換ができなくなった学生を、卒業後に生活保護へつないだ経験もございます。大学のユニバーサル化、多様化と言いますが、それは、健康的に開かれていくといった要素よりも、激しい競争社会の中で一人一人が負け組にならないようにもがき続けた結果によるものではないかと感じています。

その様に考えていますので、支援室に来ている学生を目の前にして、私が何を思うかと言いますと、「がんばりすぎるな」「マイペースでゆっくりいこう」「自分が壊れるまで勉強しなくていいよ。またできる時があるから」「自分の気持ちを大事にしよう」「自分の身体を大事にしよう」「自分を自分に取り戻そう」といったことです。学生を見ていると、「社会環境に自分自身を乗っ取られている」ように思います。「乗っ取られてしまった自分を自分のものにする」ために、「時間」と「学生との対話」をとても大切にしています。ゆっくりとした時間の中で、不器用で良いから、学生自身の気持ちを少しずつ言葉にしていく、表現していくことを支援の中心に置いています。そして、時間をかけて学生同士が「知り合える」関係をつくっていくことを目標にしています。國本先生、瀧本先生のご報告の内容とも重なる部分かと思います。

先程の瀧本先生の発表に「教員としての限界」として、「評価権者としての教員は、学生に寄り添いきることはできない」というお話がありましたが、だからといってコーディネーターが寄り添いきれるかというとそうではなく、「大学の中での支援」という限界がございます。しかし、「評価をしない人間である」ということは、学生にとって「人生を考える相手」として受け入れやすい立場かもしれません。しかし、私が意識していることは、私と学生の関係で終わってはならないということです。何より大切なのは、学生同士が出会うこと、知り合うこと、その経験を多くの学生にして欲しいと願っています。障がいのある学生達で座談会をした時も「知り合う」ことの重要性が話されていました。「わかり合う」でもなく、「感じ合う」でもなく、「知り合う」なのです。この一見淡々とした「知り合う」というのが、重要です。お互いが交じり合い過ぎず、個人の領域をおかされないところに立ちながら、知り合う。どちらが上でも下でもなく、フラットにそこに立っている感覚だと思います。

また、障がい学生支援室には、先生方からの相談もたくさん寄せられています。障がいの理解や配慮方法についての相談が主なものですが、学生や保護者からのクレームへの対応に関するものなど多岐に

わたっています。授業の感想に「死にたい」「殺したい」などの書き込みをする学生への対応など教員の不安が大きいケースは、毎週授業後教員と面談を行うなど、密に連絡を取り合っています。また、授業でパニックになった学生と一緒に障がい学生支援室に来られ、診断や支援につながることもあります。

多くの先生方は、学生の対応に非常に悩んでおられます。一人一人の悩みを、教員全体の悩みとして共有し、解決方法を模索していくために、大学内で先生方の学習や交流の場を創っていくことも重要なミッションではないかと考えています。

さて、これまで学生や教職員の現状をお伝えしましたが、この様な大学の「リアル」に対し、「障がい学生支援」という仕組を使って何ができるのでしょうか？私は、高等教育機関における「障がい学生支援」には、４つの重要なテーマがあると考えています。

１つ目は、「支援される人」という福祉の受益者から、「支援を希望する人」になることです。障がい学生支援室では、支援を受けるに当たり「支援の要望書」を提出してもらいますが、「要望する」という行為は、「困りごとを伝える」という「表現活動」だと思うのです。「表現」を通じて、権利主体へと転換していくことが、一つ目のテーマです。特に大学は、学習や研究を通じて自分を理解する「言葉」、自分を説明する「言葉」、人生の物語をつくる「言葉」に出会える場所です。これらの言葉に出会えるチャンスが、大学にはあります。学習、研究を通じて、「自分を理解していく」「自分が自分になっていく」、この様な経験ができるのは、やはり大学ならではだと思います。

２つ目は、「肌感覚としての平等」を得ることです。先程「知り合う」という話をしましたが、大学は、多くの障がい者や学生達に出会える場です。「知り合い」、友達になること。一昨年の学内のシンポジウムで障がいのある学生が、友達になると、少し慣れた頃によく「案外普通やん」と言われると話していました。「障がいがある」というだけで、とても特別な存在になっていることが、多くの問題を生んでいると思うと。このことは、教育に携わる者にとって重要な問いかけの様に思います。

３つ目は、「医療モデル」から「社会モデル」への転換という点です。大学は、どの分野よりも先んじて、その様な環境を整えていくことを使命としていると思います。

４つ目のテーマは、障がいのある学生達と共に、多くの若者たちの移行過程の変容にいかに迫っていくかということです。障がいのある学生だけではなく、大多数の学生達の発達というものにどの様に迫っていけるのか。私は、この問題を解決に導く唯一の方法も、やはり学生達が、自分の「主観」を表現することだと思います。若者の自由な表現を脅かさない環境を大学の中に作っていくことが重要だと考えています。

以上４つのことを念頭におきながら、障がい学生支援室では様々な取組を行っています。障がい学生支援の取組は、大学間で違いが大きいのですが、本学の特徴的なことを少し紹介したいと思います。

資料をご覧ください。修学支援として、「課題への支援」というものを行っています。課題提出までのスケジュールを作成することは比較的どこの大学でも行われていますが、発達障がいの学生に対して、文献を一緒に読み、重要なところを箇条書きで抜き出す、レポートの骨子を一緒に考えるといったことを行っています。あくまで、授業の補助的なもので、学生の「白紙で先生に相談に行くと怒られる。でも何からやったら良いのかわからない」という相談から始まったものですが、全く書けなかった学生が、伴走者がいるだけで意欲がわき、コツコツと取組めるようになり、こちらも驚いています。

それから、「小さな困りごと」、例えば「提出期限がわからない」「資料を失くしたが先生が怖くてもらいに行けない」「せっかくレポートを書いたが期限が過ぎてしまっていた」など、本当にちょっと

したことですが、これらが積み重なり休学してしまう学生も多く、５分から１０分の随時相談というものを実施しています。基本自由来室で、コーディネーターの手が空いていれば対応する、忙しい時は対応できないというルールを共有し行っています。

その他、障がいのある学生の「主観」や「経験」を表現し、学内全体で共有する様々な取組を行っています。「車いす交流会」を出発点とした「ゆずりあいエレベーター設置事業」や、先程 M さんより報告のありました「共生のキャンパスづくりシンポジウム」といったものも行っています。今年は、学生のみならず、学部教務課の職員や、施設管理部門、留学担当部署などの職員にも発言して頂きました。「主観」、つまり「気持ち」や「思い」を表現し共有することは、先程お伝えしました 4 つのテーマを進める上で、非常に意味のあることだと考えています。

3. 共に授業をつくる：困難を抱える学生の学びを支える授業づくりと、より良い授業をつくるために必要なこと

さて、改めて本日のテーマを確認したいのですが、今日のテーマは「様々な困難を抱えた大学生への授業づくり」というものです。

先程の報告を受け、主に教員と学生が参加する「授業」の形態を、私なりにまとめてみました。パワーポイントの資料をご覧ください。①は、教員が学生理解に努め、支援しているというものです。学生からの自己紹介はあまりない状態です。②は、学生から申出と書いていますが、「自分を伝える」という行動、経験をした上で、教員が理解し配慮しているという状態です。本日の M さんの発表の状況は②に該当すると思いますが、ひとりで先生へ伝えることが難しい時などは障がい学生支援室の後方支援を受けることもあります。③は、②に加え、学生同士の「自己紹介」がなされ、学生同士の相互承認がなされている状態です。通常の大学の授業では難しいと思いますが、ゼミなどをイメージして比較的長期間にわたり同じメンバーで取り組む授業をイメージして頂きたいと思います。

これら①～③について、事前に M さんへ説明し、M さんの受けとめや授業における理解度がどの様に異なっているか、または異なるだろうと思われるのか考えてきて頂きましたので、まず M さんより報告して頂きたいと思います。

次に、両先生に、M さんの発表に対する感想を一言ずつと、学生と共に、またはそこに障がい学生支援室も加わる形で、共に授業をつくるということについてどの様にお考えになるか、意見を聞かせて頂きたいと思います。

続いて、國本先生へ質問です。先生は、「『授業づくり』において大切なことは学びの主体である学生のことをどこまで理解していくかという姿勢や、その理解のための営みではないか」という思いを大切にされ、困難な現状と向き合っておられますが、お話を伺い、先生方の営みをもっとシェアできる仕組みが必要なのではないかと思いました。学生相談室の「ちょこっとノート」のお話はありましたが、もっと一緒に動ける仕組みが必要なのではと。今の状況を出発点として、今後どんなビジョンをお持ちでしょうか？

次に、瀧本知加先生へ質問です。瀧本先生のご報告では、課題の一つとしてマンパワーの不足が挙げられていましたが、より良い授業を行うためには、どの様なマンパワー、または仕組みが必要だとお考えでしょうか。また、「インクルーシブな学生集団」について、「どのような学生でも、受容され包含さ

れることによって、自らも他者を受容し、自分自身をも受容することができるような雰囲気」とおっしゃられていましたが、私は学生達を見ていて、「受容」とか「共感」を強要されることに嫌気がさしているように感じています。それが先程お伝えした「知り合う」という言葉だと思うのですが、その様な若者がどの様に仲間になっていくのか、具体的な事例がありましたらご紹介ください。

指定討論は以上でございます。